

## ～海洋調査船「平安丸」乗船記～

海洋センター業務部総務・漁業無線担当

平成24年6月18日(月)に海洋調査部 主任研究員2名とともに、底生生物調査のため出港する「平安丸」に乗船し、丹後半島沖の若狭湾へ向け午前9時45分に出発。

底生生物調査とは、ズワイガニやカレイ類をはじめ、小型エビ類やヒトデ類などの資源状況をモニタリングするもの。京都府機船底曳網漁業連合会のMSC認証の審査や年次監査にもこの結果が示されるという。具体的には、平安丸で桁網を曳き、網に入った様々な生き物の種類、量、体長等を調査する。

予定の現場まで約2時間、平安丸は約13ノットで北進する。

操舵室から前方を眺めていると、海の上を鳥が飛んでいる...いやよく見るとトビウオだ(写真1)。船の波に驚いたトビウオが慌てて逃げているのである。海面から20-30cmのところをグライダーのように、落ちそうになると水面で尾びれを振り、また加速するように飛んでいる。

(写真では少し小さくて見えないかな...)

そんな眺めをみていると、前方に大きな船が。海上自衛隊の船だ。海上訓練をしているのであろうか。

船はゆっくりと波に乗り上下に揺れる。



ようやく1日目の調査場所に到着、冠島沖の水深235mである。

到着すると水温、塩分濃度を測定するため測定器(CTD)を沈めて行く(写真2)。船内では測定機器からのデータをパソコンで確認している(写真3)。水深230mは水温2.8℃だった。冷たそー!!

測定器を巻き上げるときは、ワイヤーが錆びないように淡水をかけて引き上げる(写真4)。



水温、塩分の測定が終わると、いよいよ桁網を海に投入。「平安丸」の乗組員がみんなで網を海に投入(写真 5, 6)。



網の長さは約 30 m、桁の巾が 8.4 m、高さ 1.5 m で、漁獲物の選別がスムーズに出来るよう魚捕部分が二重網になっており、内側の網目は大きく、外側の網目は小さい。これを今回は 540 m までワイヤーを延ばして、速度約 1.9-2 ノットで、30 分間曳き海底や海底近くにいる生物を漁獲する。

30 分後、網の引き揚げを始める。網が揚がるまで約 20 分(写真 7, 8)。



選別台には外網の漁獲物が(写真 9)、甲板には内網の漁獲物(写真 10)が広げられ選別作業が始まる。



約 1 時間かけて、内網と外網の漁獲物をそれぞれ選別し、かごに入れる(写真 11)。アカガレイ、ノロゲンゲ、ズワイガニ、エビ、ヒトデ、タコ、イカなどの他、知らない生物もたくさん。1 回の網で約 30 種類の生物が漁獲される。邪魔にならないように、少しお手伝いをさせてもらった。

選別作業が終わると種類ごとにかごに入れ、重さを測定する(写真 12：写真のはかりは波で揺れる船の上でも正確に測定できる特別なもの)。



その後、アカガレイなどのカレイ類やノロゲンゲなどのゲンゲ類などは、パンチングという方法で大きさを測る(写真 13)。特殊な紙に魚をのせ、千枚通しで紙に穴を空け、口先から尾ひれの付け根までの長さを測定する。メジャーを使うよりも多くの魚を素早く測定できる方法だそうだ。



アカガレイについては、年齢を調べるため耳石を採取する。雄雌ごとに体長を測定し(写真 14)、頭を切り落として(写真 15)、耳石のある部分に切れ目を入れ引き裂くようにし(写真 16)、ピンセットで2つある耳石を採取する(写真 17)。



耳石は専用の保存ケースに入れて持帰る(写真 18)。

1回目の網入れから次の網入れまで2時間30分かかり、この間に様々な作業を行い底生生物の調査が行われる。

2回目の網入れは15時から水深215m、3回目は京丹後市間人沖まで移動し17時30分から水深218mで操業し、調査が終わったとき時刻は19時をまわっていた。

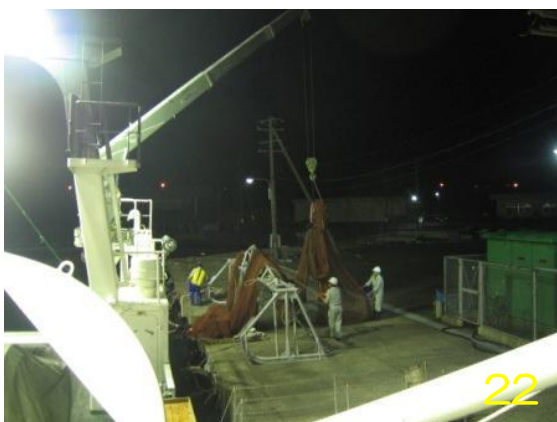
船の乗組員と一緒に夕食をいただいた(写真19)。賄い飯って言うんですかね。鶏の唐揚げ、レタスとトマト付き、貝たくさんの味噌汁、カレイの煮付け、ご飯がとても美味であった。

食後、最後4回目の網入れの時刻20時まで少し体を休めることにした。10時間近く船に揺られているとさすがに睡魔が襲ってくる。15分ほど食堂でうつらうつらしてしまった。

20時になり最後の網入れが始まった。今回は水深175mでの曳き網である。網が揚がり船の明かりの中で最後の調査である(写真20)。すべての作業、調査が終了し、22時に海洋センター向け出発した。到着は0時30分の予定。

帰路についたものの、研究員はまだまだやることがいっぱいだ。サンプルの袋詰めや調査票の整理などセンターに着くまで休む暇もない(写真21)。

0時30分過ぎに海洋センターの岸壁に接岸し、桁網を降ろし1日の調査が終了(写真22)。船のベットの朝まで就寝させてもらった。



今回、初めて調査に同行させてもらったが、調査する底生生物は種類が多く、小さなものもすべて選別しなければならないため、時間がか

かり、また、クモヒトデの多さにはびっくりした。平安丸の乗組員の協力と研究員との息のあった作業が印象的であった。このような研究は多くの職員の努力の上に成り立っているものであることが理解できた乗船体験であった。